220130伊従発表<1>

首里城正殿 「建てること・使うこと・描くこと」の歴史

2022.01.30.

委員　伊従勉

首里城説明会　発表目次

□　はじめに
■1　歴代首里城正殿は洪武礼制に規定された身舎七間規模から始まり3世紀間規模を維持
■2　18世紀～19世紀正殿建築の変化を描いた絵図
■3　首里城絵図の画法の発展（配布資料に不掲載の図版あり）
□正保城絵図（現存せず）から稲福親雲上盛時の絵図差図事業（1701～07）へ
□透視図法の琉球への伝搬（配布資料になし）
■4　18世紀～19世紀正殿唐破風向拝の変化と冊封儀注の変容・皮弁服龍文規制
□4-1　冊封儀注の変化（表1　IIIa→IIIb）と唐破豊三間とハの字殿陛の必要性
□4-2　登楼拝御書礼が必要とした三列殿陛に相当するハの字階段
□4-3　正殿唐破豊龍文配置と大清会典官服龍文規制強化による龍柱相向への変更（表4）
□4章の結論
□さいごに　首里城とは琉球のどのような象徴なのか

――――――――――

□　はじめに

以下の事実を確認しておきたい。

（1）　東アジア世界に初めて国として認知された時期の琉球は、明朝の朝貢・被冊封国として朝鮮、安南同様、明朝の域外藩屏国（蕃国）として歴史に登場した。

（2）　蕃国王としての中山王が冊封儀を受ける王殿として、西向きの首里城正殿は建設された。初期遺構が発掘調査で確認され、それ以後一度、柱列位置が移動しその位置で固定した事実（身舎七間・五間）が確認できる。

（3）　正殿は冊封儀を内部で執行する場所として、明会典の礼制的規制を受けた。それのため、奥行きの深い基壇が必要であった（冊封儀詔勅開読案設置のため）。

（4）　清朝初期の礼制整備（大清会典）が遅れた康熙朝期の間に、琉球独自の王殿建設が始まり、それは冊封儀を御庭で執行することへ導いた。正殿の様式変更は、冊封儀を行う場所が三段階で変化した三つの時期に区分できる。

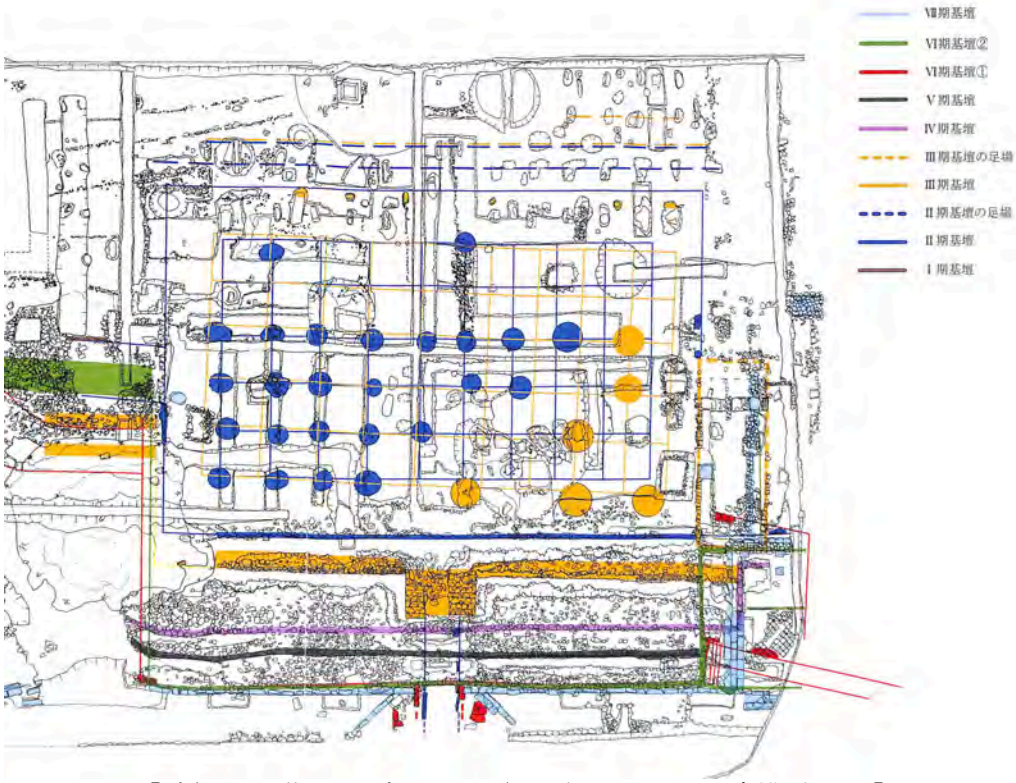
（5）　平成復元の正殿と装飾体系は、冊封儀を御庭で行うようになる18世紀初頭以降の第三段階のうち、同世紀後半1768年重修以後の姿である。しかし、それ以前の形態（身舎九間・五間、孫庇・唐破風一間向拝）から、1768年の姿（復元形態）に変更された理由が史料で明確に確認できたわけではなかった。平成復元以降37年の研究成果をもってしても、すべてが解明されたわけではない。特に、王府末期の史料・尚家文書の開読が進むまで、あと10年以上の探索が必要なはずだ。

□　本発表の意図は、委員の個人的な研究の成果として、18世紀半ばの正殿形態、特に唐破豊周辺の形態変化の理由の一端を明らかにすることである。歴史的建物の復元は、その時点までに究明された「暫定的」研究成果に基づかざるを得ない集団的営為である。細部が何故、その形になったかの理由は、学問的にすべてが明らかであるわけではない。史料と絵図があり写真があっても、その理由が解明されない限り、復元物は「暫定的」なものに留まる。私が理解する「暫定的」とは、あらゆる学問が逃げることのできないこの存在条件の意味においてである。

　参考までに、管見の限りでの、従来の正殿に関する研究成果一覧を末尾に資料として添付した。ご参考になれば幸いである。

■1　歴代首里城正殿は洪武礼制に規定された身舎七間規模（尚貞王冊封1683年まで）

図1　正殿地区発掘報告書　正殿起源の柱列（ローソク基礎）遺構図



［沖縄県埋蔵文化財センター編発行2016　図15遺構重ね図］

図2　正殿の起源と最終正殿柱列重ね図［©iyori 2022］［伊従2010］

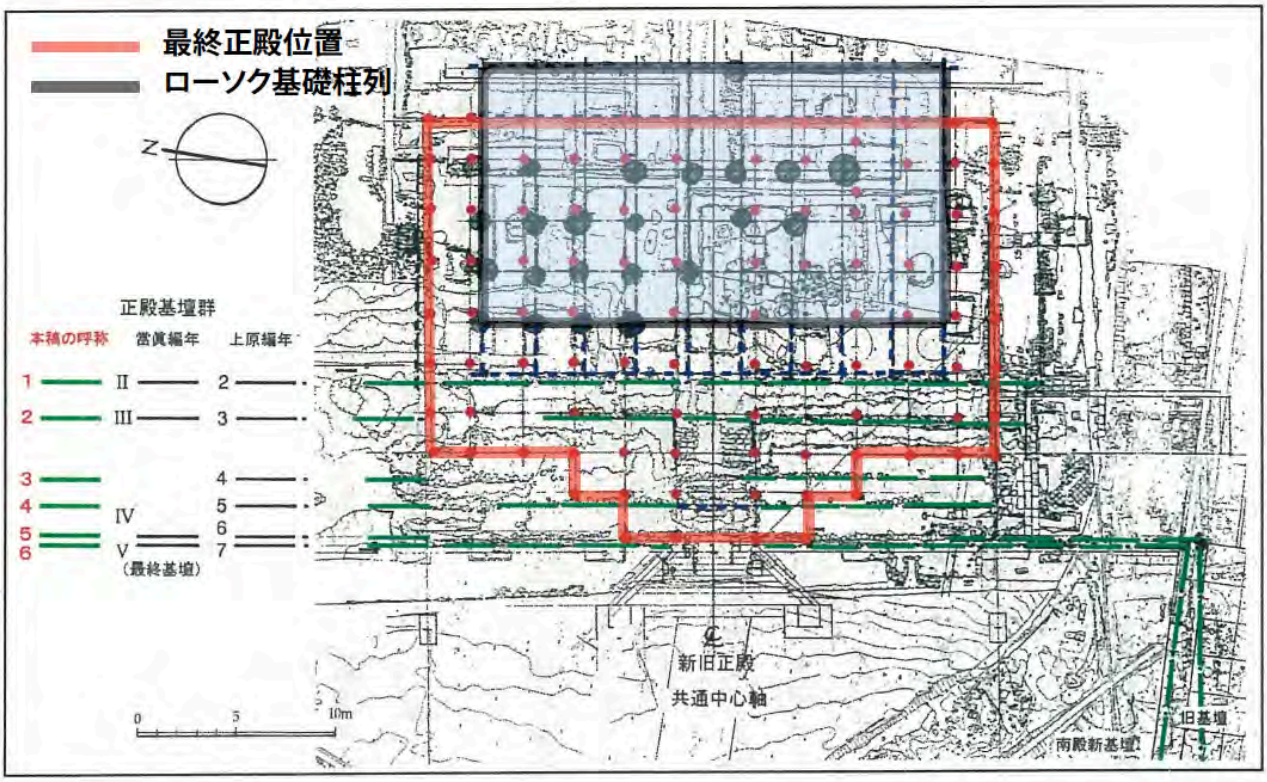


図２首里城正殿跡遺構図と 1768 年重修正殿柱列との合成図（点線青色格子は第一石列基壇の正殿柱列推定図。ハッチング丸印は原図の「ローソク地業」。）　※ 編年出典：注７〔當眞・上原一九八七〕、注 10 同書

ローソク基礎柱列から最終正殿柱列位置への移動は柱間一間のみ

□ 洪武礼制(1369～85)・礼儀定式(1387年)が定める藩王(蕃王)宮規模
官員房舎公侯:「前庁七間或五間…中堂七間九架、後堂七間七架」
明史稿(1683) 與服宮室制度
「洪武十二(1379)年諸王府制…承雲殿十一間後為國殿次曰存心殿各九間、
承雲殿両廡為左右二殿…後[1387年]為前中後三宮各九間」

図3 首里城正殿の起源(ローソク基礎柱列)と迎詔儀執行の可否[伊従2021a,b]

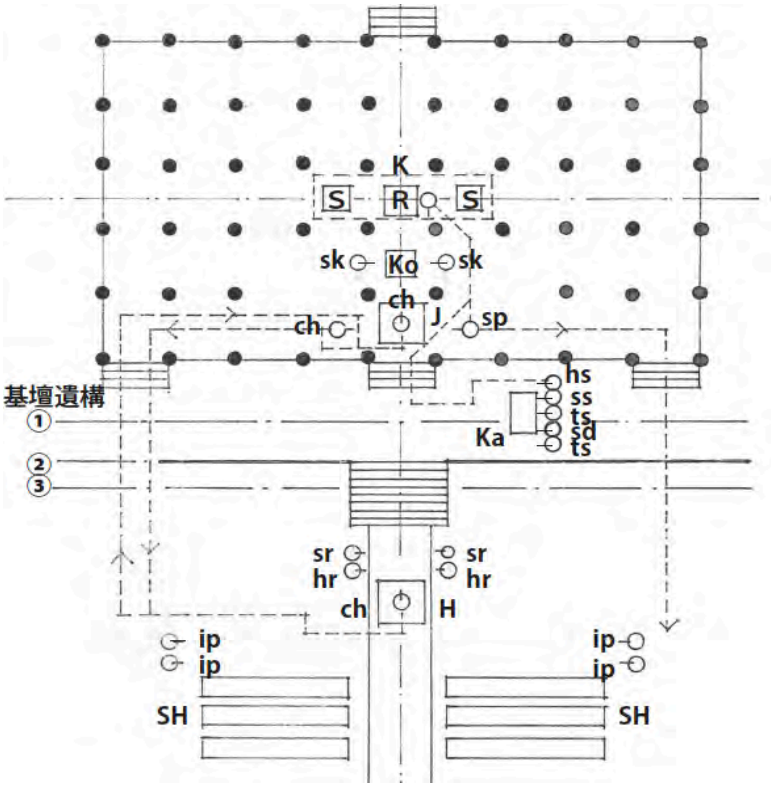
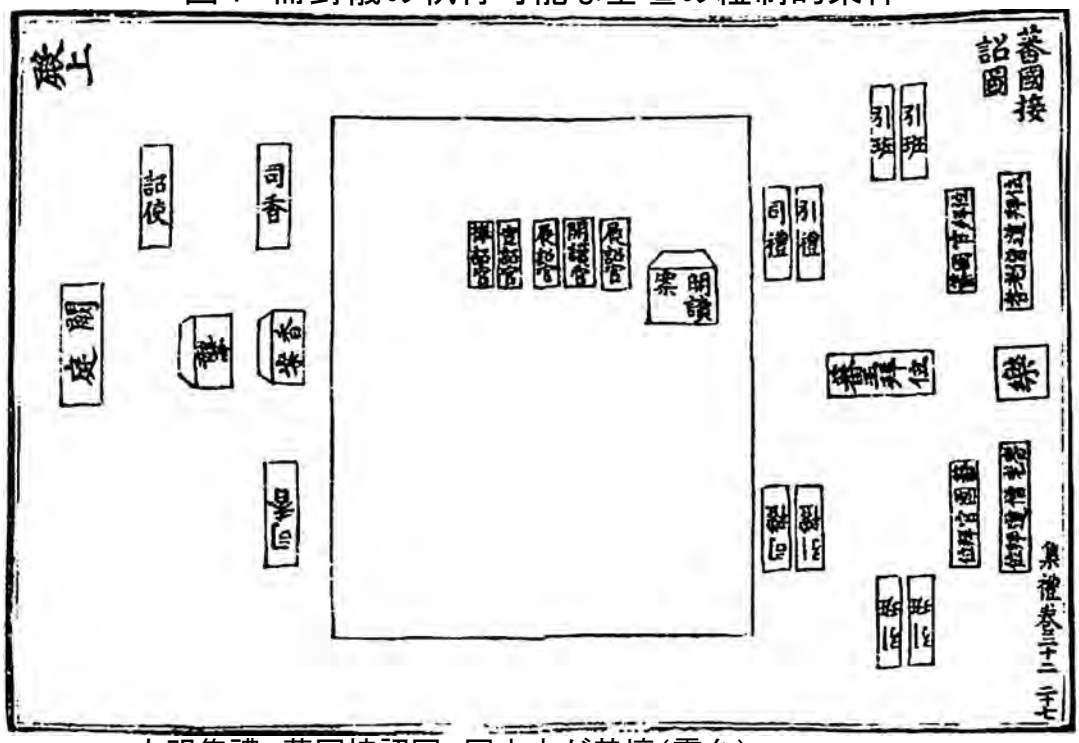


図4 冊封儀の執行可能な基壇の禮制的条件



大明集禮 蕃国接詔図 図中央が基壇(露台)[原田2004:図11]

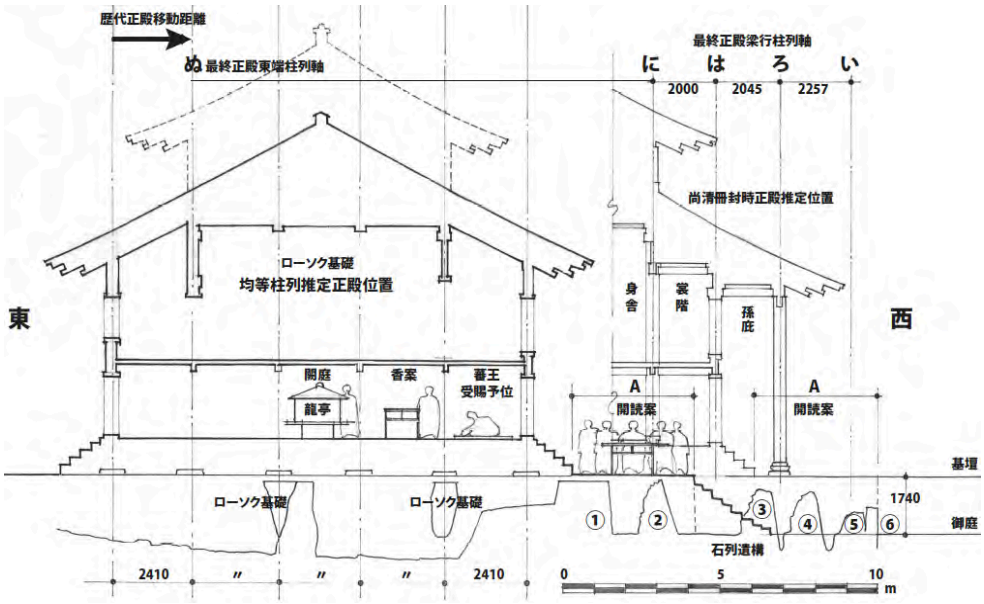


図5　正殿起源柱列位置（ローソク基礎柱列）と最終身舎柱列位置の関係

表1　歴代中山王冊封儀からみた正殿柱列位置と基壇殿陛・龍柱変遷と典拠

冊封儀場形式	冊封年/王	中華皇帝	正殿身舎規模［桁・梁行・孫庇・向拝］	正中殿陛形態	龍柱向き/台石	柱列・基壇位置	冊封儀闕庭位置	典拠 絵図・史料
I	察度1383	洪武	七［9・5・なし］	平行耳石	?	ローソク基礎①	正殿内	蕃国受印物儀 1370 *1
	武寧・思紹	永楽	七［9・5・？］			ローソク基礎②		蕃国迎詔儀 1385 礼儀定式 1387 *1
	尚巴志王統	洪熙～成化	七［9・7・孫庇3］			最終柱列⑥		
	尚円～尚永	成化～万暦						
II	尚寧1606	万暦					正殿内+基壇	夏子陽使録
	尚豊1633	天啓						胡靖
	尚質1663	康熙	正殿焼失後		あり向?			張学礼使録
	尚貞1683	康熙	七［9・7・孫庇3］					汪楫使録
IIIa	1705	康熙	九 11・7・孫庇5・唐破風1		正面/欄干耳石		御庭	御城中差絵図 *2
	1709	康熙	焼失					比嘉朝健*3
	尚敬1719	康熙	九 11・7・孫庇5・唐破風1					冊封中山王図・仲秋宴図
	1722	康熙						評定所僉議*4
	1729重修	雍正			正面/台石			球陽・比嘉景常 1940 *5
	1730ca	雍正						「首里古地図」
	尚穆1756	乾隆					御庭+登楼拝御書礼	首里那覇全景図屏風首里城部分/周煌使録
IIIb	1768重修	乾隆	九 11・7・孫庇5・唐破風3	ハの字	相向/方形台石			『寸法記』
	尚温1800	嘉慶						絵図なし
	尚灝1808	嘉慶						絵図なし
	1838尚育	道光						鎌倉「御城元之図」「城元中秋之宴之図」 *6
								図帳（勢頭方・当方）*7
	1848重修	道光						尚家文書*8
	1866尚泰	同治						冊封御規式之図・尚家文書 *9
琉球藩	1877	光緒			正面/方形台石		清国関係謝絶	仏海軍写真 *10

■2　18世紀～19世紀正殿建築の変化を描いた絵図儀礼執行形式変化の要因

図6　1701-07年「御城中差絵図」
[『沖縄県史　図説編　前近代』2019:198](部分)

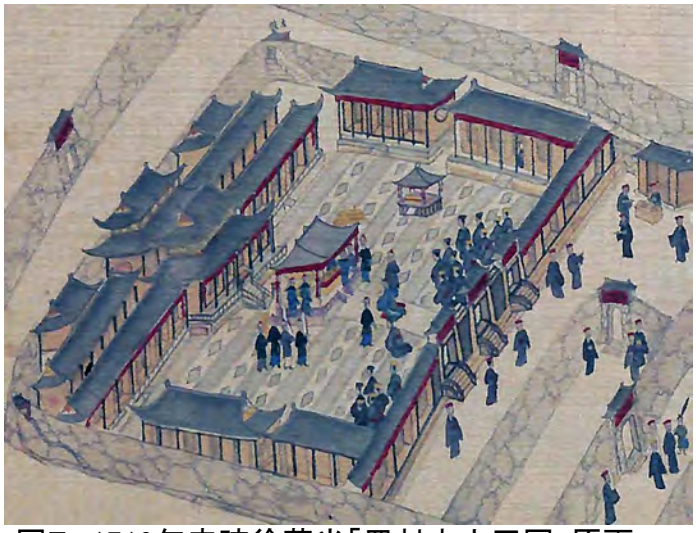


図7　1719年来琉徐葆光「冊封中山王図」原画
[麻生・茂木編　2020:18](部分)

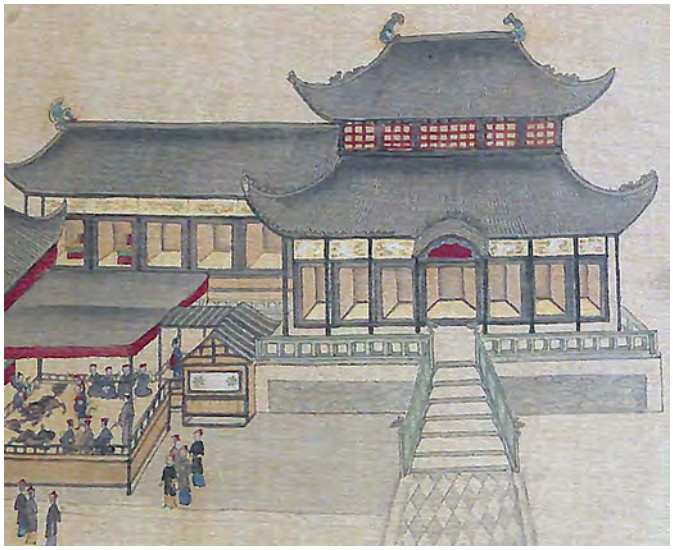


図8　1719年来琉徐葆光「仲秋宴図」原画
[麻生・茂木編　2020:22]

図9　1729-31年頃「首里古地図」首里城部分
[『琉球国絵図史料集』第*集、1994]

図10　1754-68年屋慶名政賀「首里那覇全景図屏風」

図11　1768年「百浦添御殿普請付御絵図」

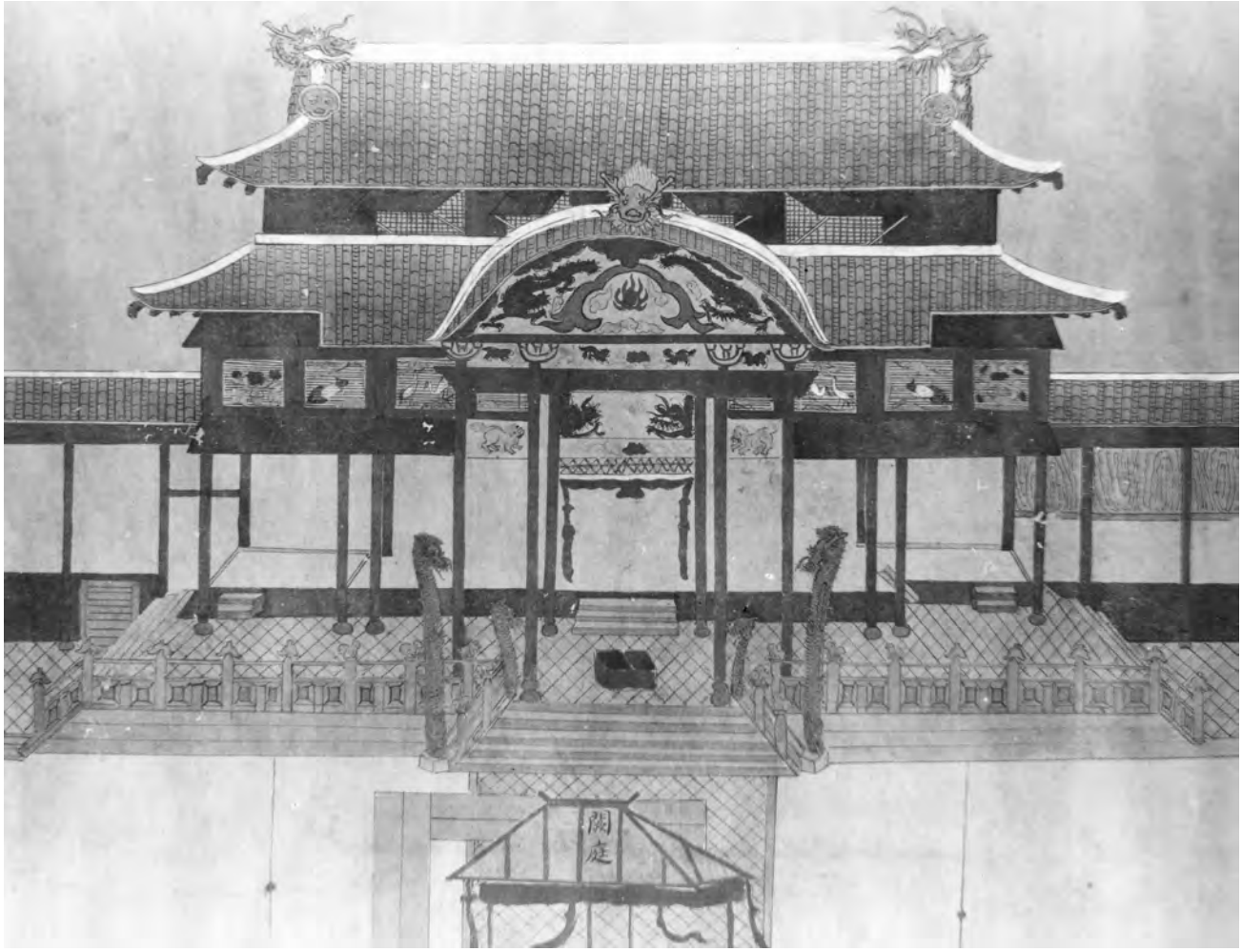


図12　1838年尚育王冊封儀設営図[鎌倉芳太郎撮影1982:写真41]

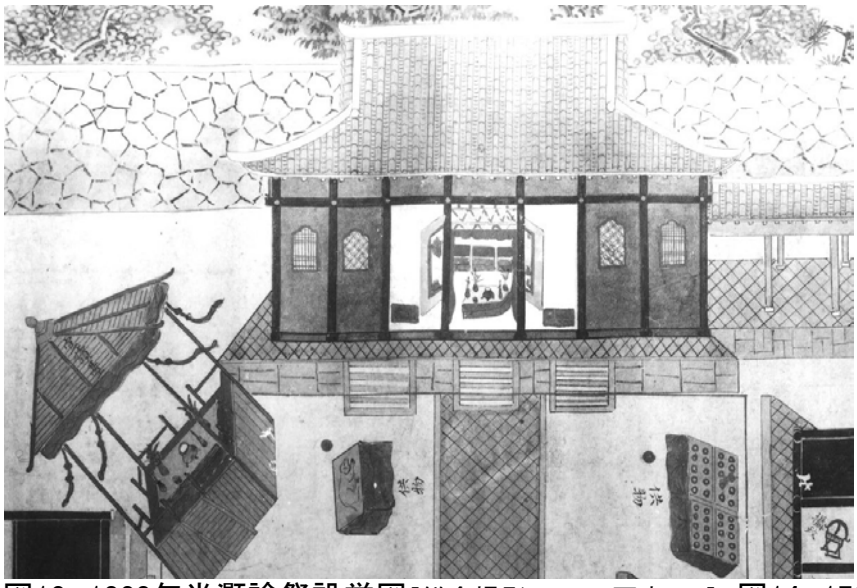


図13　1838年尚灝諭祭設営図[鎌倉撮影　1982:写真150]

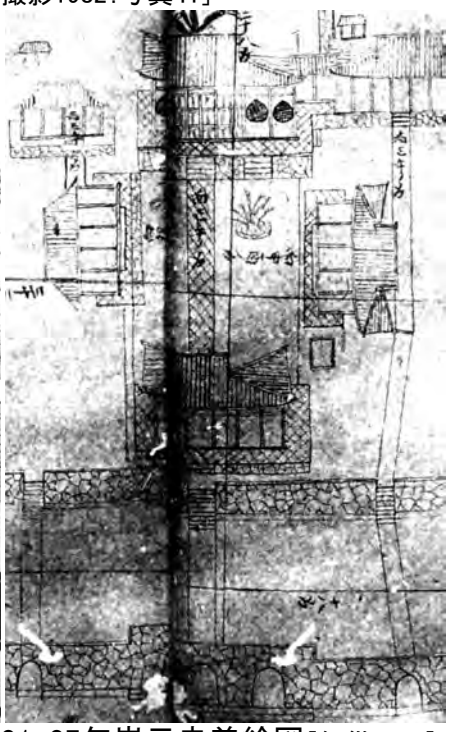


図14　1701-07年崇元寺差絵図[伊従2007]

□平成正殿復元時、以上に示した18世紀の正殿建築の変化、特に唐破風一間向拝(1705年)が三間幅に拡幅された1768年に、ハの字階段(殿陛)へ置き換わった事実は確認されていた。また、龍柱が1705年には正面向きであったが、1768年に相向に変えられたことも確認されていた。
しかし、その理由を説明する史料が現存せず、あるいは説得的に説明できる学術的探索が未完であった。「暫定的復元」たる理由である。では、令和復元はそれを説明できるだろうか？？？

■3　首里城絵図の画法の発展

正保城絵図（現存せず）から稲福親雲上盛時の絵図差図事業（1701～07）へ

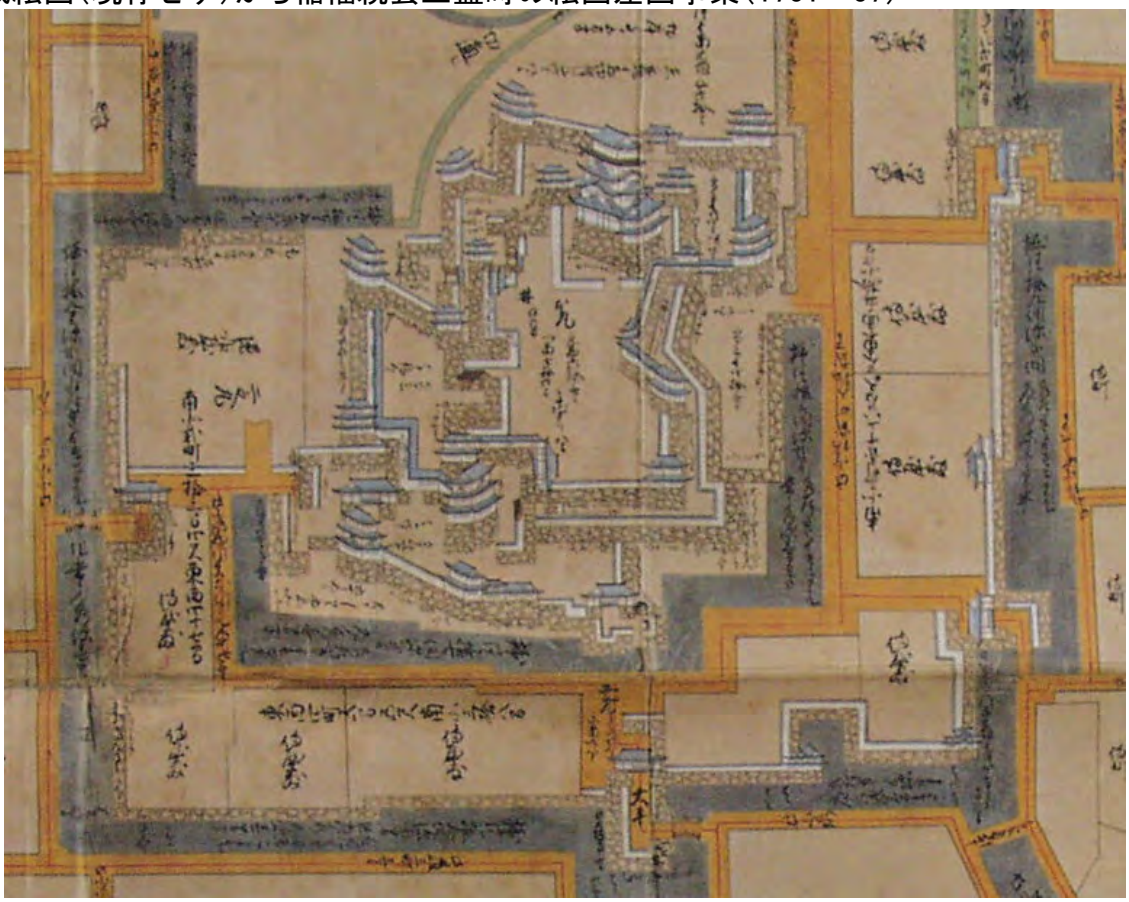


図15　正保城絵図事例　福山城絵図　1640年代［鳥羽正雄編『内閣文庫所蔵正保城絵図』1976より］

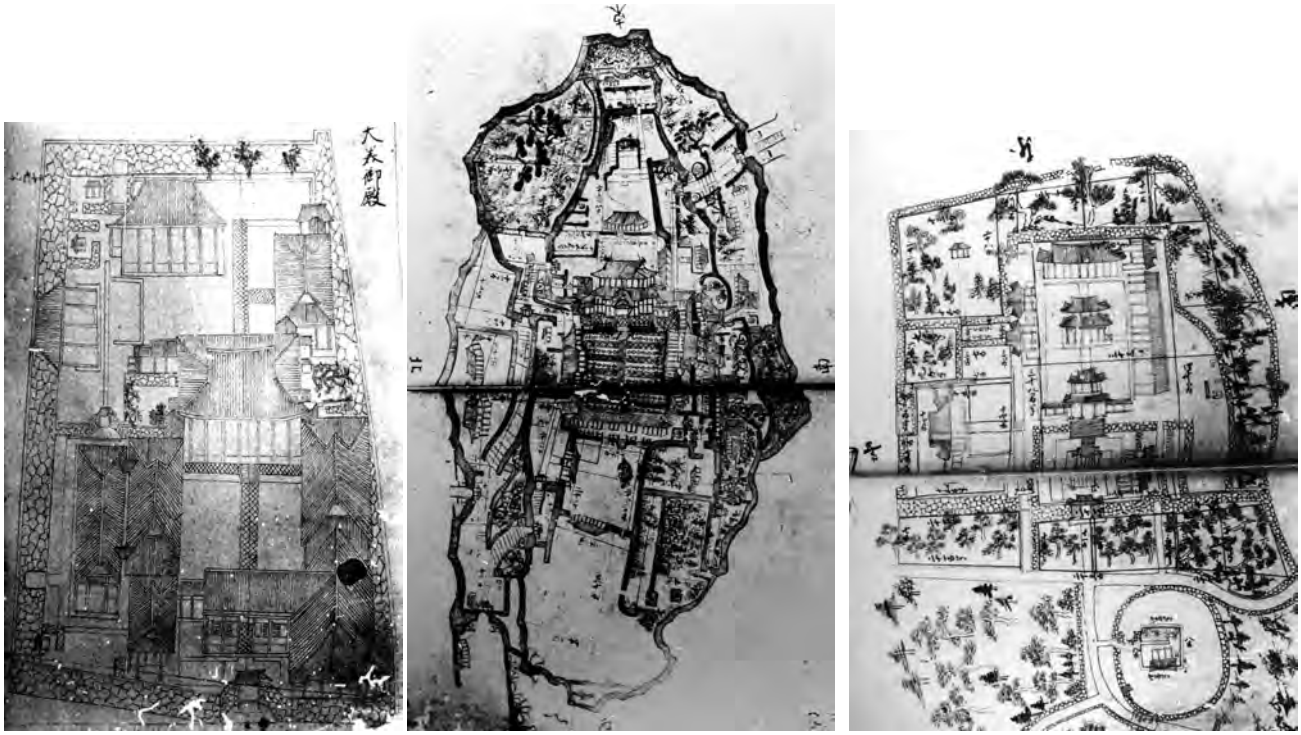


図16　稲福親雲上盛時の絵図差図事業（1701～07）の現存写真：旧森政三資料［伊従　2007］

稲福親雲上盛時絵図并差図奉行(1701～07)首里城以下王府施設の絵図差図製作事業

御城中、**大美御殿**・内間御殿・同東之御殿・西原間切内間御殿・首里殿内・真壁殿内・儀保殿内・平等所・玉御殿・**浦添ようとり**・今帰仁城・高嶺城・知念城・玉城城・久高島・上天妃・下天妃館屋・天尊親見世通堂・三重城・**円覚寺**・天王寺・天界寺・**崇元寺**・安国寺・慈眼院龍福寺・［琉球］七宮・金武寺［那覇市家譜資料（三）:699］（**太字は写真が現存する絵図**）

琉球の土地・建物図面と世界史的画法の普遍的進展経過：図形の実形を示す図法

図17　軸測投象　ミリタリー・カヴァリエ図法［玉腰・伊従2000］

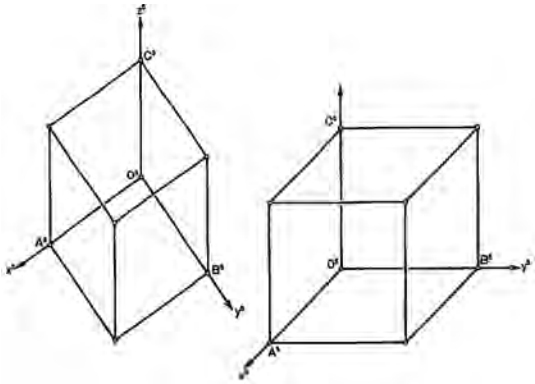
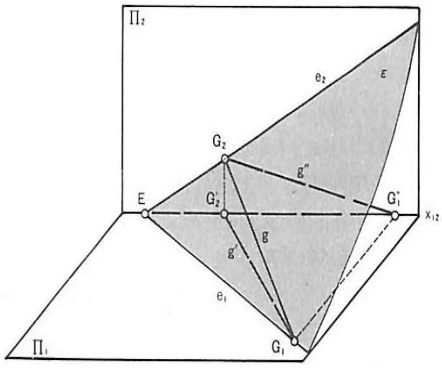
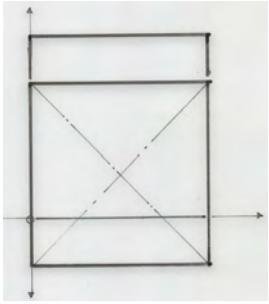
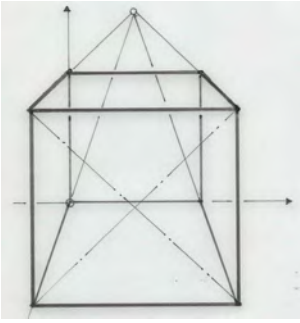
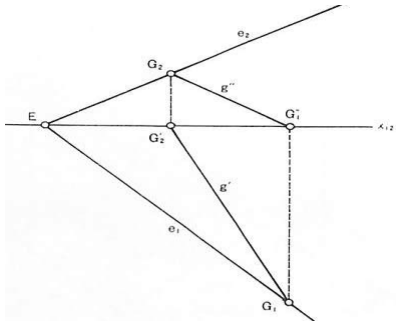


図18　正投象図法［玉腰・伊従2000］





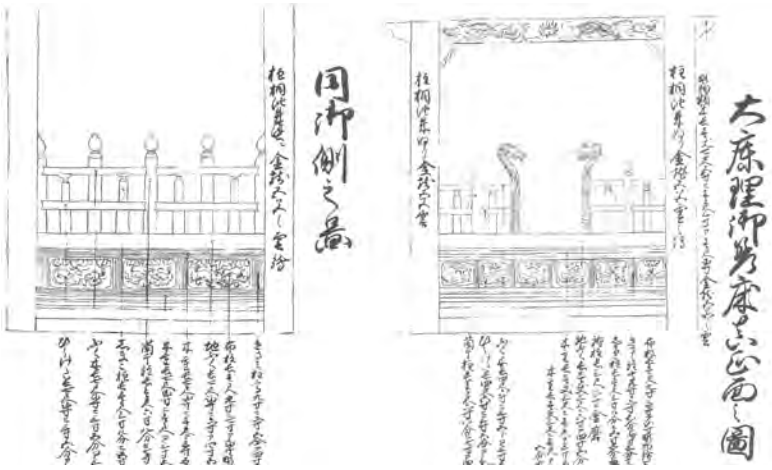




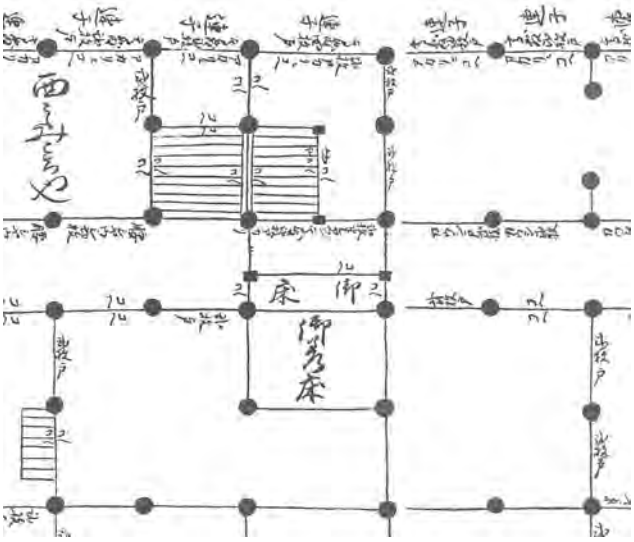
変則的カヴァリエ図法　　一消点透視図法　　立面図と平面図の連結図法

1701年稲福親雲上の王府施設差絵図
制作以降に用いられた建物の描画法

Gaspard Monge, "***Geométrie Descriptive***"
1799, Paris, Baudouin 正投象図法の嚆矢



側面図　　立面図



『寸法記』　　平面図

琉球絵図では起こし絵図以上の連結図法（正投象法）は発明されなかった

■4　18世紀～19世紀の正殿建築の変化をもたらした冊封儀注の変容と皮弁服龍文規制

□4-1　冊封儀注の変化（表1　IIIa→IIIb）と唐玻豊三間とハの字殿陛の登場

IIIa 御庭で完結する冊封儀(図7)

IIIb 冊封儀注に1756年冊封から加わった冊封使登楼拝御書礼が必要としたハの字殿陛（図11）

表2　18～19世紀　正殿前冊封儀　礼式次第に登場した登楼拝御書礼　［伊従2021b］

順序	儀礼名	場所	順序	儀礼名	場所
①	接詔礼	守礼門	⑥	問安礼	御庭・闕庭
②	詔書龍亭入奉神門	御庭	⑦	詔勅請留礼	御庭・闕庭
③	上香詔書礼	御庭・闕庭	⑧	登楼拝御書礼	正殿二階
④	冊封詔書宣読礼	御庭・宣読台	⑨	［更衣］	正殿下庫理御休息所
⑤	受賜物礼	御庭・闕庭・王拝座	⑩	北殿相見礼・宴	北殿

表3　清朝期　皇帝宸筆（御書）頒賜事例一覧（図中赤字：冊封事例）

頒賜年	皇帝	受領王	御書頒賜	儀注有無	御書楼登楼
1683	康熙	尚貞	中山世土	使録	△
1719	康熙	尚敬	×		×
1724	雍正	尚敬	輯瑞球陽		
1740	乾隆	尚敬	永祚瀛□［土＋需］		
1756	乾隆	尚穆	×	使録	○
1786	乾隆	尚穆	海邦済美		
1800	嘉慶	尚温	海表恭藩	使録	○御書楼初出
1808	嘉慶	尚灝	×	冊封使一件	○
1822	道光	尚灝	屏翰東南		
1838	道光	尚育	弼服海隅	現存しない	［○］*1
1854	咸豊	尚泰	同文式化		
1865	同治	尚泰	瀛嶠屏藩		
1866	同治	尚泰	×	尚家文書	○

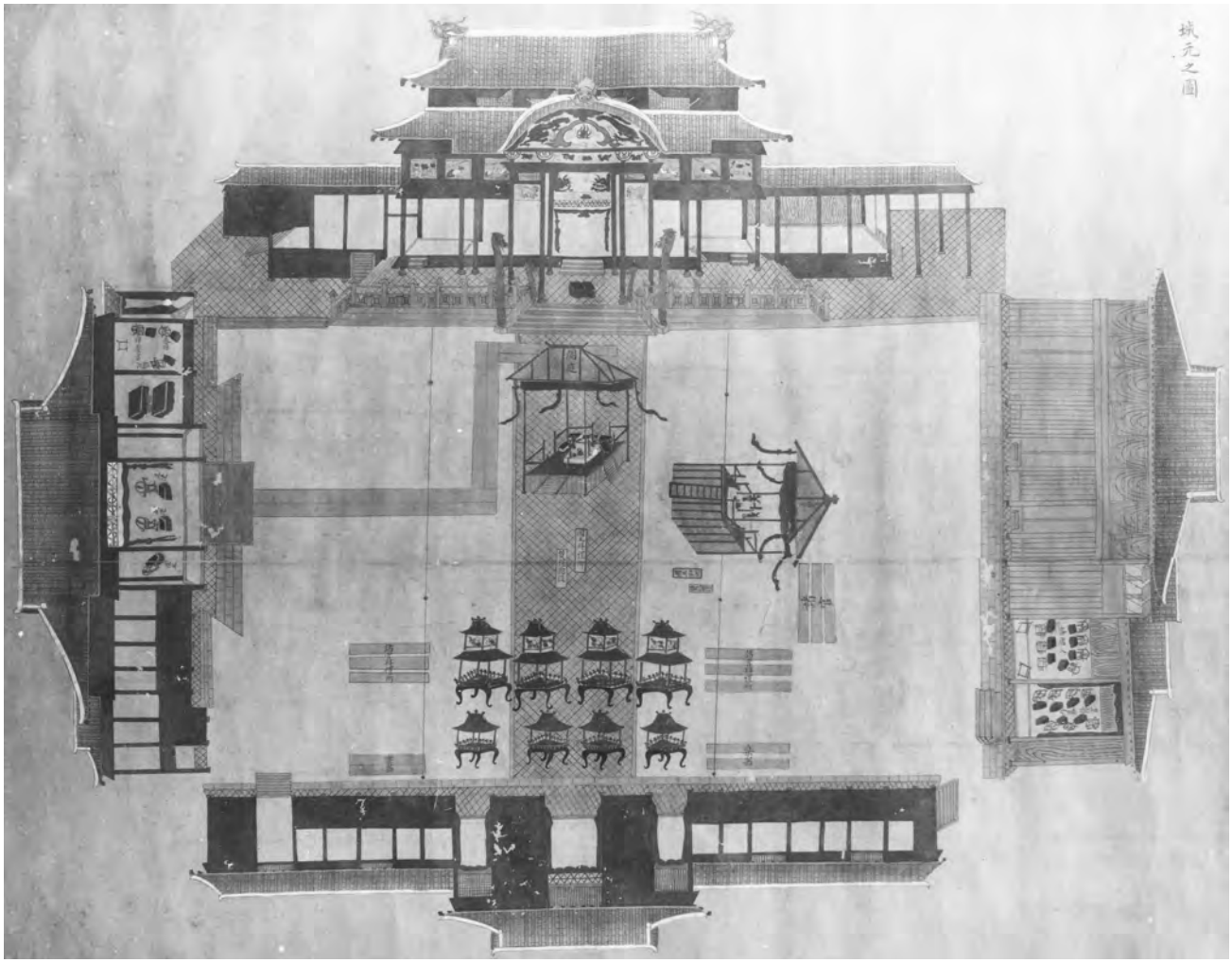


図19　1838年尚育王冊封儀設営図　［鎌倉芳太郎撮影1992：写真41］

□4-2　登楼拝御書礼が必要とした三列殿陛に相当するハの字階段
1866年尚泰冊封御礼式日記にみる「登楼拝御書礼」

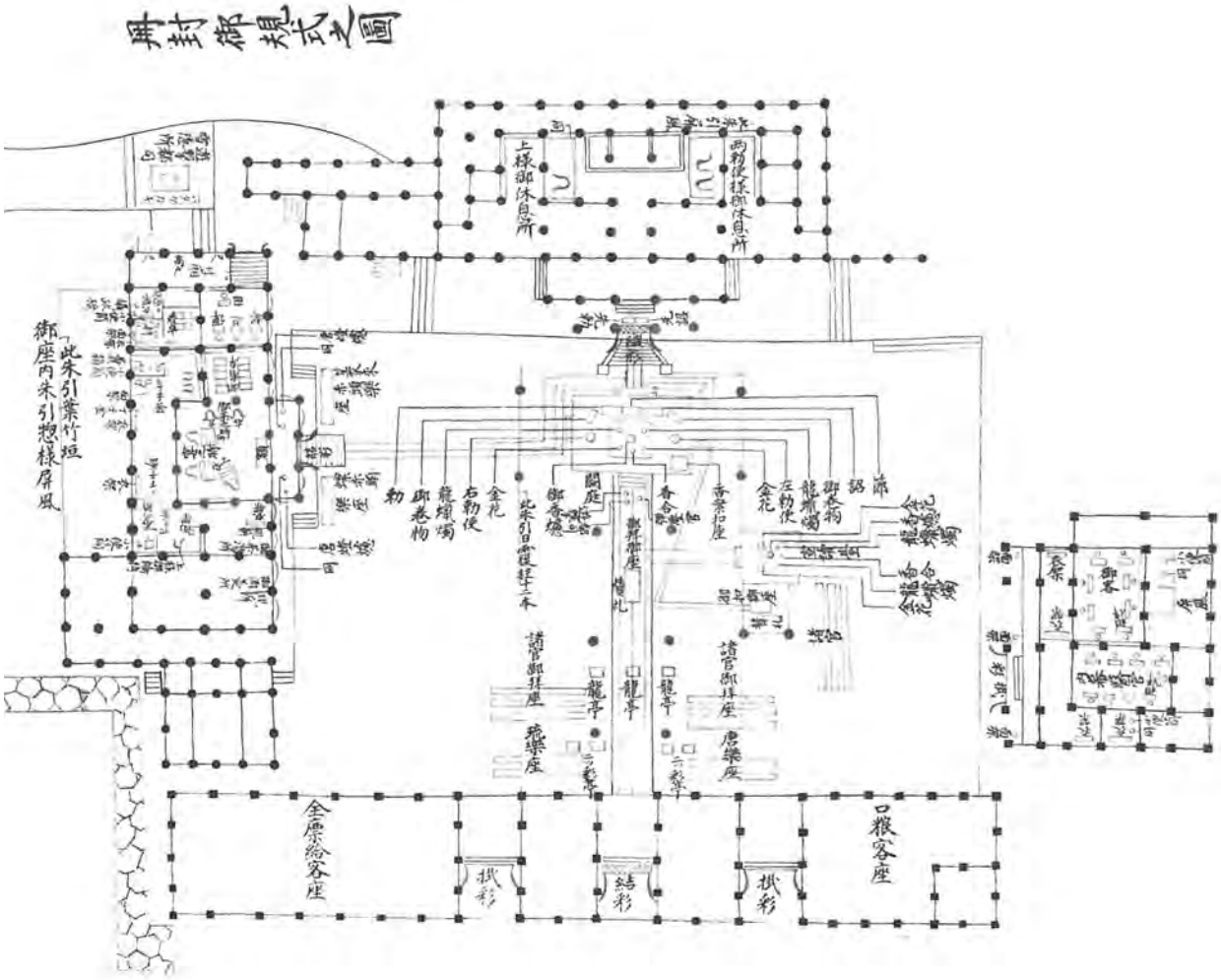


図20　1866年「冊封御規式之図」
中山王府御座當方編　1867『冠船之時御座構之図』

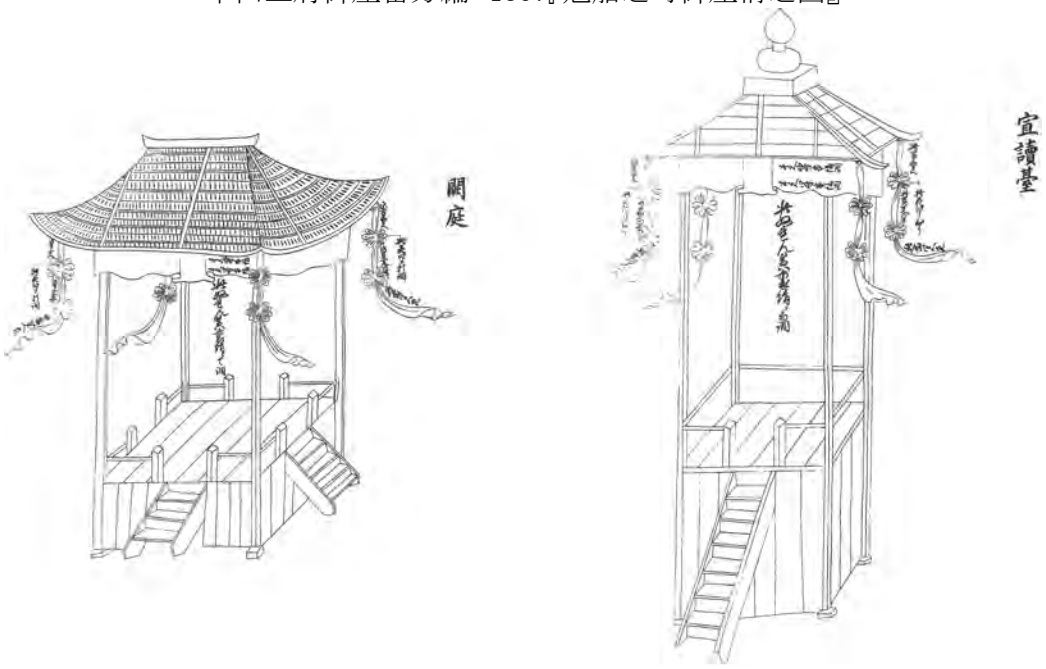
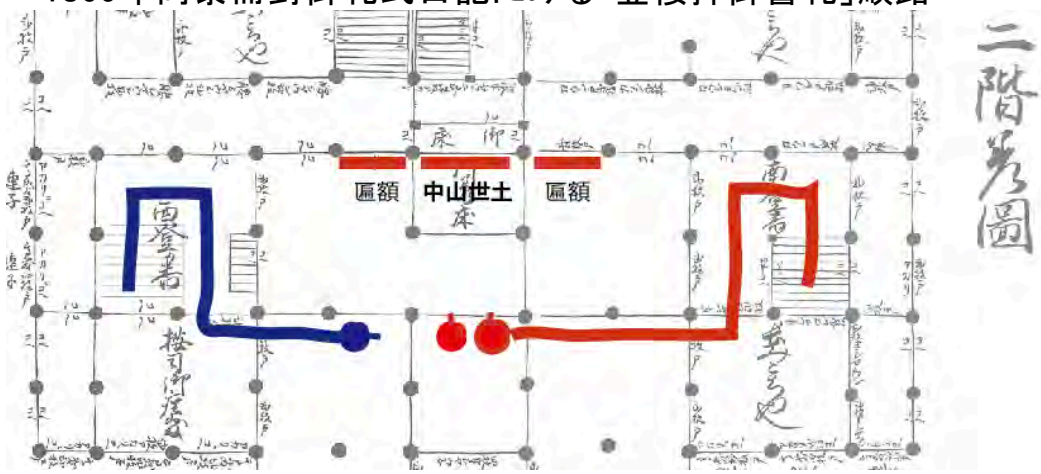


図21　御庭に設置される闕庭と宣読台
中山王府御座當方編　1867『冠船之時御道具之図』

1866年尚泰冊封御礼式日記にみる「登楼拝御書礼」順路



冊封使・尚泰動線は、『冠船御礼式日記　冊封』
那覇市歴史博物館所蔵「尚家文書141、145」による

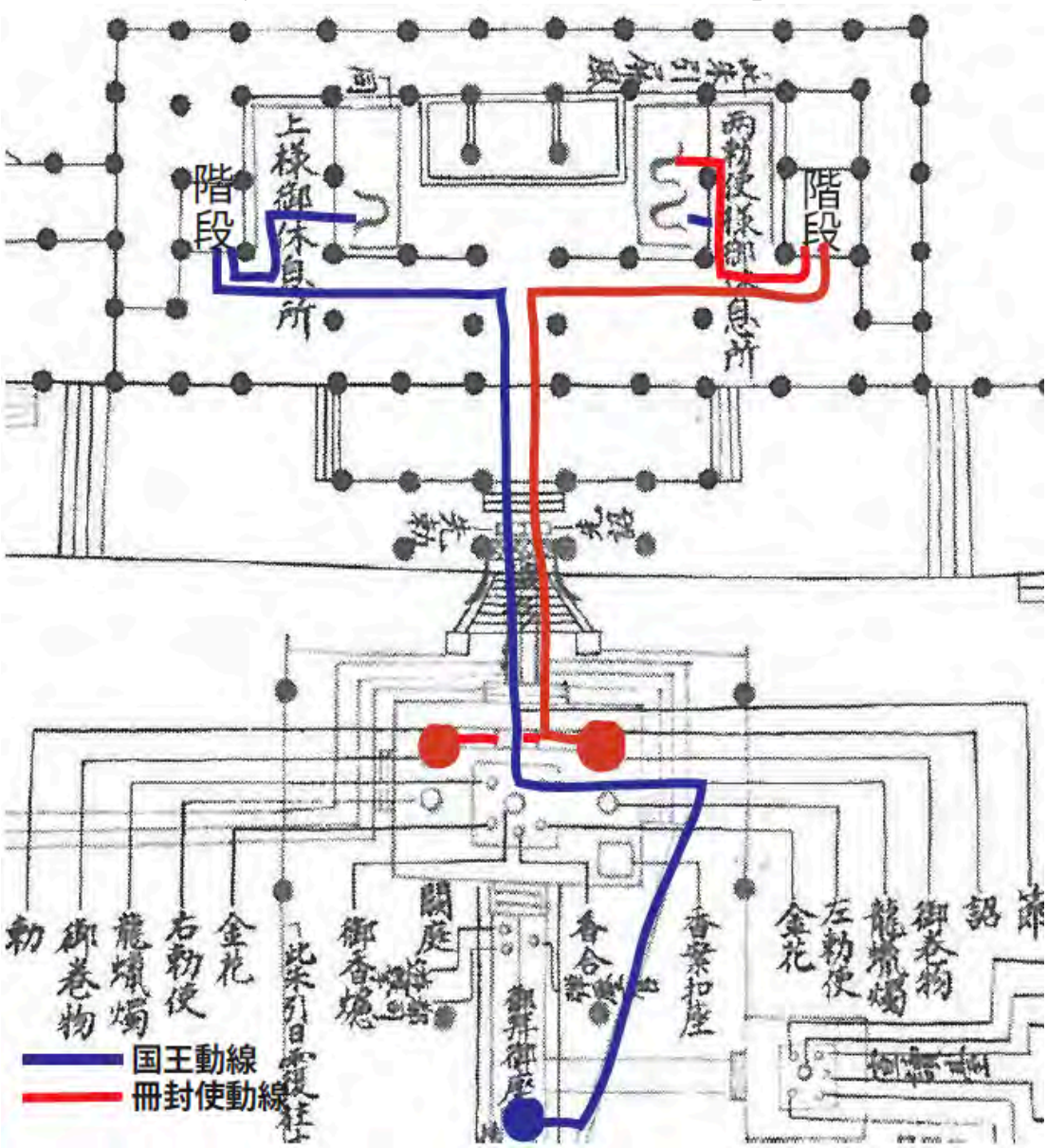
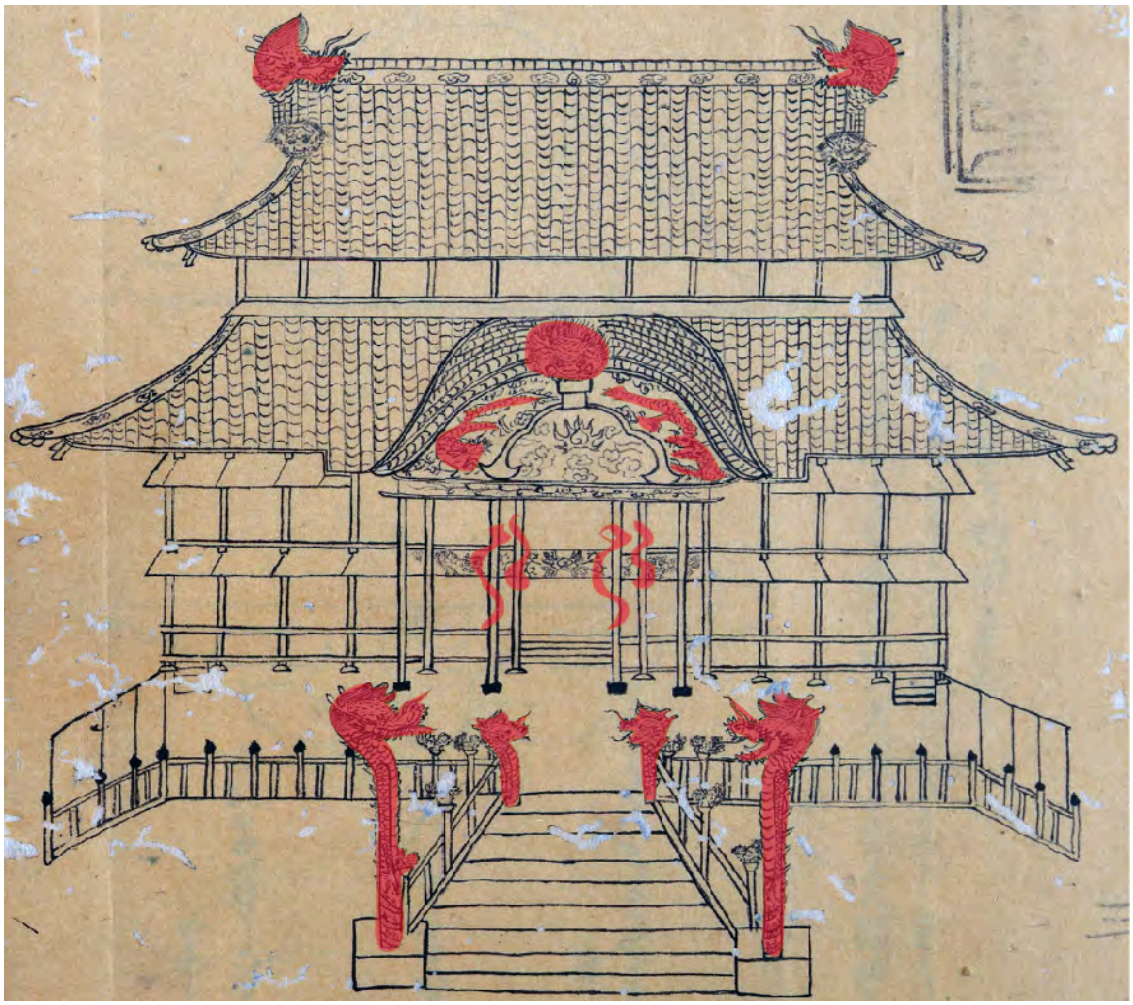


図22　冊封儀「登楼拝御書礼」順路
（上図：寸法記1768加工、下図：1866冠船御座構之図　冊封御規式）

□4-3　正殿唐玻豊龍文装飾と大清会典官服龍文規制強化による龍柱相向への変更（表4）

	龍文位置	左	正面	右	文献
御差床	御差床上部 額木	南向［行龍］吽形	火炎宝珠	北向［行龍］阿形	『寸法記』1768 『御普請絵図帳』 1848
	大庫理御差床 小龍柱	南向吽形	［中山世土］	北向阿形	
	正殿棟	正龍南向		正龍北向	『寸法記』1768 『御普請絵図帳』 1848 正龍・行龍用語は 嘉慶朝会典 （1818年） 冠服規定
唐玻豊	唐玻豊棟		龍頭正面向［正龍］		
	唐玻豊妻壁	南向［行龍］吽形	火炎宝珠	北向［行龍］阿形	
	透し欄間獅子牡丹	南北向一対	南北向一対	南北向一対	
	御轎倚御座羽目板	南向き獅子	南北向一対	北向き獅子	
	正殿孫庇正中柱	下り行龍南向吽形		下り行龍北向阿形	
	唐玻豊向拝柱	上り行龍南向吽形		上り行龍北向阿形	
	基壇高欄小龍柱	南向行龍吽形		北向行龍阿形	
	大龍柱	南向行龍吽形		北向行龍阿形	

図23　1768年・1846年百浦添御普請絵図にみる正龍1と行龍6対



□国王皮弁服[尚泰王]の龍文と唐玻豊の龍文の対応について

[鎌倉1982:写真434,435]

戦前に残っていた尚泰王皮弁服の龍文は大清会典図(1811年)「郡王」冠服規定に従う。

表5　尚泰王皮弁服の龍文構成

龍文位置	左	正面	右	文献
肩	正龍		正龍	鎌倉1982: 写真434 大清会典図 巻47冠服
胸		正龍		
袖(裏)	不明		不明	
前裾	行龍右向	左向き行龍	行龍左向	

図24　尚泰王皮弁服　[鎌倉1982:写真434]胸背中央に正龍[五爪]、両肩に正龍2、裾に行龍3

図25　皮弁服胸部分[五爪正龍]図案と紅型襯衣行龍図案[鎌倉1982:写真435、441]

□ 現存中山王御後絵写真の皮弁服にみる龍文変遷

表6 御後絵龍文変遷[鎌倉1982御後絵写真]と清朝冠服郡王規定の変遷

龍文位置 国王	左帳	左肩/裾	正面胸	右肩/裾	右帳	制作年
尚円	4爪行龍 吽形	なし	なし 玉石帯	なし	4爪行龍 阿形	1861
尚真	4爪行龍 吽形	なし	なし 玉石帯	なし	4爪行龍 阿形	?
尚元	3爪行龍 吽形	なし	なし 玉石帯	なし	3爪行龍 吽形	1857
尚寧	3爪行龍 吽形	なし	なし 玉石帯	なし	3爪行龍 吽形	1796/1817
尚豊	4爪行龍 吽形	なし	なし 玉石帯	なし	4爪行龍 吽形	1721/1796 /1817
	上部左帳	左肩/袂/裾	胸/裾中央	右肩/袂/裾	上部右帳	
尚貞 1683	5爪行龍3	なし/なし/4爪行龍	なし	なし/なし/4爪行龍	5爪行龍3	1796/1859
1690		康熙朝会典:五爪四團龍補。及五爪龍緞満翠四補等緞。				
[尚純]	なし	4爪行龍/行龍/行龍	なし/なし	4爪行龍/行龍/行龍	なし	1817
尚敬 1719	4爪行龍2	5爪正龍/行龍/行龍	正龍/正龍	5爪正龍/行龍/行龍	4爪行龍2	1754/1796 1817
1732		雍正朝会典:五爪四団龍補五爪龍緞満翠四補等緞。				
尚穆 1756	4爪行龍2	5爪正龍/行龍/行龍	正龍/正龍	5爪正龍/行龍/行龍	4爪行龍2	1796/1857
1764		乾隆朝会典:旁龍圓文四(*1)				
尚温		御後絵写真なし				
尚灝 1808	4爪行龍2	5爪正龍/行龍/行龍	正龍/正龍	5爪正龍/行龍/行龍	4爪行龍2	1837
1811		嘉慶朝会典図:繡五爪行龍四団				
1818		嘉慶朝会典:繡五爪行龍四団(*2)				
尚育 1838	4爪行龍2	5爪正龍/行龍/?	正龍/行龍	5爪正龍/行龍/?	4爪行龍2	1852
1841		礼部則例				
尚泰 1866		5爪正龍/行龍	正龍/行龍	5爪正龍/行龍		鎌倉1982: 写真434

図26 明朝期皮弁服には龍文不在、上部帳に行龍文あるのみ(尚寧御後絵)

□皮弁服の龍文は尚敬王以降の皮弁服に現れる

図27　尚穆王御後絵の龍文配置（制作1796/1857年）

図28　清朝冠服制郡王朝服の龍文は乾隆会典から旁龍（行龍）に限定される［会典図］

□清朝冠服規定の改定にもかかわらず、琉球では正龍4配置（胸背両肩）を止めなかった

図29　尚灝御後絵

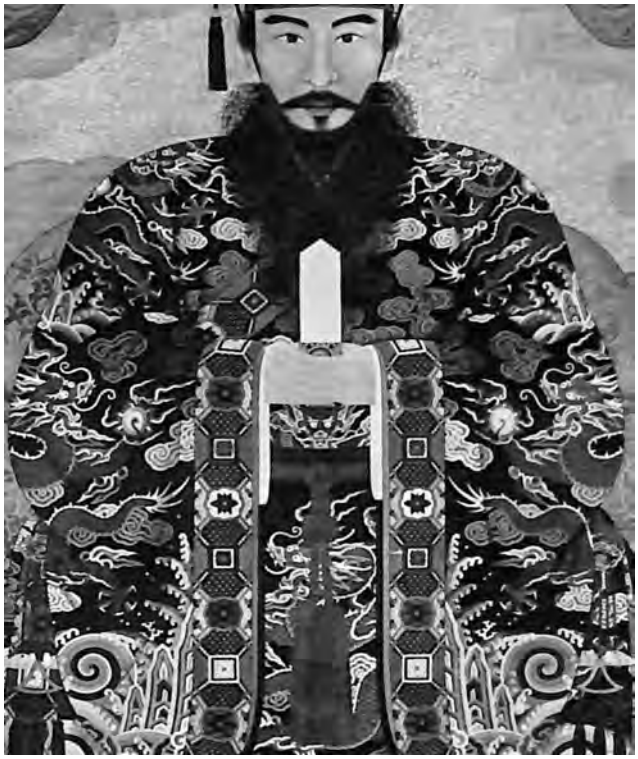


図30　尚育御後絵（裾中央龍文が行龍）

□裾の龍文は行龍に変更した（尚育・尚泰）

図24　尚泰王皮弁服　［鎌倉1982：写真434］

■4章のまとめ

□皮弁服龍文配置の変化と唐玻豊向拝の龍文配置は呼応し、1768年重修時に龍柱は相向に変更された

・清朝期に始まった（琉球で製作される）中山王皮弁服の龍文配置は、乾隆朝大清会典の改定（1764年）までは、郡王朝服の規定に対応して正龍四（胸・背・両肩）が可能だったが、乾隆以後行龍のみに変更された。琉球ではそれにもかかわらず、裾正面の龍文が正龍のまま、尚穆・尚灝まで維持されたが、尚育・尚泰に至り、裾の龍文は行龍（横向き龍文）に訂正された。

・皮弁服の龍文配置と正殿唐玻豊の龍文配置は図像配置としては図像学的に同じ原理に随うものと考えられる。蕃国王宮殿の装飾に詳しい龍文規制が明記されなかった大清会典の整備の遅れ（康熙朝・雍正朝）に乗じて、中山王府正殿には龍文が先行的に配置された（が、龍柱の起源は不明である）。18世紀前半の正面向きの龍柱（正龍）と一間幅の唐破風向拝は絵図により確認されたが、龍文の図像体系としては不完全なものであった。

・乾隆朝（1764）以後の大清会典冠服（郡王）規定には正龍使用が禁じられた。唐玻豊出御の舞台装置の龍文配置についても、正龍の多用が禁止されたと久米村の重臣は理解したはずだ。これが、1768年重修時の龍柱の相向への変更の理由と考えられる。この配置は、尚泰王皮弁服写真が示すように、尚泰冊封時まで維持されたものと考えられるから、1866年冊封時点の龍柱の向きが正面向きとは考えにくい。

・正殿の諸絵図において、18世紀前半の正面向き龍柱（軸測投象法と一消点透視図法）と18世紀後半以降の相向龍柱が確認された。正面向きも相向表示も画法表示（立面図・カヴァリエ図法・一消点遠近法）としてほぼ正確であり、18世紀中に龍柱は事実として、正面向きから相向に変更されたと確認できる。相向龍柱と三間幅唐玻豊そしてハの字階段は、19世紀に4回の冊封儀の舞台となった。

・1877年来琉の仏海軍巡洋艦乗り組み員が撮影した正殿写真に写る正面向きの龍柱は事実である。18世紀中葉の龍柱の向きの変更の理由は、上記のようにほぼ解明できた。同様に、1866年の冊封後に、何故正面向きに変更されたかを説明する文献が発見されるまで、あるいは、その理由が学術的に確認されるまで、研究の進展を待つべきである。

□唐玻豊の三間幅への拡幅とハの字階段登場の理由

・1705年重修時に登場した正殿孫庇の一間幅唐破風向拝と孫庇の高床化は、御庭に冊封儀礼の場所を移すことを結果として招いた。基壇の奥行が冊封儀執行に支障を来すようになったからである。1712年再建の正殿も同様であったはずだが、様式変更の理由は未解明である。

・ところが、清朝皇帝が頒賜した御書（宸筆）匾額を飾る正殿二階へ、冊封使が登楼し礼拝する儀礼が1756年尚穆王の冊封儀（正使全魁・副使周煌）から始まった。

・御庭から基壇に登る石階段（石ていし）に、冊封使用（南側優位）と国王用（北側劣位）を区別する必要が生じた（中央は詔勅書が昇降する）。本来、蕃国王宮での冊封儀や蕃国礼の執行には、紫禁城太和殿のように中央を丹陛として左右三列の殿陛が必要であったが、明朝期首里城では、左右の殿陛の代わりに御庭南北の基壇階段を用いた。さすがに、その状態に戻るわけには行かない。中山王の控え座が御庭南側にあったからだ。

・スケールの小さい正殿御庭では、正殿前に殿陛三列は設けられない。そこで、ハの字形の階段が設けられ、同時に唐破風向拝が三間幅に拡幅されたのである。この時点で、唐玻豊の龍文配置と中山王皮弁服の龍文は図像学的に相互に対応することになった。

・これにより、洪武帝が規定した左優位（南）・右劣位（北）の規定が、冊封儀の状況下のみ正殿内部に復活し、三間幅になった唐破風向拝がそれを明示した。しかし、日常の下庫理（一階）儀礼において、正殿内の座位秩序は、1729年に王座を中央に移設して以降、国王の日常的活動拠点の書院や奥書院の側である南が優位、北が劣位と規定されていた。

■さいごに　首里城とは琉球のどのような象徴なのか

首里城とは、前近代東アジア世界の外交秩序であった礼制的朝貢・冊封体制（貿易を含む）のなかで、中山王の統治権力を担保する儀礼執行の場所であった。全国の神女職が祀る各地の社稷（御嶽）の総本山の御嶽群を城内に抱えた複合的国家施設であった。

薩摩藩が琉球を経済的に支配していたとはいえ、当時の徳川幕府は、この外交世界の埒外におり、薩摩の支配を示す施設は、首里城内に明示されなかった。それは支配を隠蔽する薩摩藩の意図でもあり、被冊封国であることを暗に誇示する王府の主張が、正殿の意匠や中山王の皮弁服の龍文装飾に含まれていた。

正殿の構造と装飾体系は、この前近代東アジア世界に生きた中山王府が依拠した華夷体制下の権力装置として、理解されなくてはならない。しかも、清朝を宗主国とする華夷世界は、近代の帝国主義の時代に入り廃滅した。それは生き返ることはない。

絶滅した華夷礼制世界の文化財として、ソウルの景福宮やヴェトナムのユエの宮殿とともに、首里城は沖縄の那覇に再び復元されようとしている。

首里城正殿にかかわる既往文献一覧

伊従勉　編

［注記］本一覧には、中山王府正史や史料の評定所文書、歴代宝案、尚家文書などは含まない。

■18世紀以降百浦添普請日記・寸法記・絵図帳　現存一次資料及び部分抜書記事一覧

普請年	普請日記	寸法記	絵図帳	近代抜書	典拠
1704-05	×	×	×	比嘉景常1940	
1712	×	×	×	比嘉景常1940	
1728-29	×	×	×	比嘉景常1940	家譜・球陽
1768	×	○	○		寸法記
1811	×	×	×		尚家文書497-500
1846	○	○	○		尚家文書497-500
1853	×	×	×		尚家文書135
1931-33	×	○	○		文部省

［百浦添御普請日記　1704-05年抜書］比嘉景常　1940「首里城正殿の龍柱に就いて」『琉球新報』1月1、5、6日掲載、沖縄県立図書館所蔵『天野鉄夫新聞切抜帳　琉球学集説』6・7所収、

［百浦添御普請日記　1710-11年抜書］同上比嘉景常記事『琉球新報』1940.01.05.

比嘉朝健抜書　毛氏高嶺盛昌家譜［1710年龍柱制作担当石奉行］　比嘉朝健「琉球の石彫刻龍柱」『アトリエ』1926年

比嘉朝健抜書　趙氏謝敷筑登之親雲上宗相（逢）家譜［1710年龍柱制作加勢筆者並彫琢龍柱欄干主取］　同上比嘉「琉球の石彫刻龍柱」『アトリエ』1926年

真境名安興抜書1722年評定所僉議、

［百浦添御普請日記　1728-29年抜書］前掲比嘉景常記事『琉球新報』1940.01.06.

中山王府　(1768)『百浦添御殿普請付御絵図帳［并材木寸法記］』沖縄県立芸術大学所蔵、沖縄総合事務局（編）『首里城関係資料集』1987所収

中山王府　(1768)『百浦添御殿普請付御絵図并材木寸法記』鎌倉芳太郎（筆写），沖縄県立博物館所蔵、沖縄総合事務局（編）『首里城関係資料集』1987所収

中山王府評定所　1838『冠船御礼式日記　冊封』「尚家文書57」

鎌倉芳太郎撮影　(1838)「城元之図」［1838年冊封儀設営絵図］『沖縄文化の遺宝』写真41、岩波書店、1982年

鎌倉芳太郎撮影　(1838)「仲秋宴之図」［1838年仲秋宴設営絵図］『沖縄文化の遺宝』写真40、岩波書店、1982年

鎌倉芳太郎撮影　(1838)「諭祭先王廟図」［1838年尚灝王諭祭設営絵図］『沖縄文化の遺宝』写真204、岩波書店、1982年

中山王府御双紙庫理　(1839)『図帳（勢頭方）』［1839年写本］沖縄県立芸術大学所蔵；沖縄総合事務局（編）『首里城関係資料集』1987所収

中山王府御双紙庫理　『図帳（當方）』沖縄県立芸術大学所蔵；沖縄総合事務局（編）『首里城関係資料集』1987所収

中山王府　1842『百浦添御普請絵図并日記』那覇市歴史博物館所蔵「尚家文書497」

中山王府　1842-46『百浦添御普請日記』那覇市歴史博物館所蔵「尚家文書498」

中山王府　1842『百浦添御普請日記　當方』那覇市歴史博物館所蔵「尚家文書499」

中山王府　1842『百浦添御普請絵図帳』那覇市歴史博物館所蔵「尚家文書500」

[1855年の正殿図](龍柱相向)後掲比嘉景常1940年記事『琉球新報』1940.01.06.に言及
中山王府評定所　1866『冠船御礼式日記　冊封』那覇市歴史博物館所蔵「尚家文書141」
中山王府御座當方編　1867『冠船之時御座構之図』沖縄県立博物館所蔵;縮小復刻:沖縄総合事務局(編)『首里城関係資料集』1987所収
中山王府　1866『冠船之時御道具之図』沖縄県立博物館所蔵;縮小復刻:沖縄総合事務局(編)『首里城関係資料集』1987所収
阪谷良之進　1931～33『首里城正殿(沖縄神社拝殿)特別保護建造物修理工事関係資料』沖縄県立図書館所蔵「阪谷良之進文書」、一部は沖縄総合事務局開発建設部編『首里城関係資料集』1987年所収
文部省沖縄神社拝殿修理事務所編　1931-33『国宝建造物沖縄神社拝殿修理工事新設計内訳書』同上所収
文部省沖縄神社拝殿修理事務所編　1931-33『国宝建造物沖縄神社拝殿図』同上所収、ただし縮小版

■明清朝礼制文献

[明]『正徳大明会典』1509年、解題山根幸夫、汲古書院、1989年
[明]李東陽等奉敕撰、[明]申明行等奉敕重修、1587『大明会典』[万暦本]、台北、文海出版社,1964.3
[明]徐一夔等奉勅編、御製序:嘉靖九 [1530] 年『大明集禮』;邦訳(蕃国礼):原田禹雄訳注『明代琉球資料集成』榕樹書林、2004年
[清]伊桑阿等纂修　1690『大清会典』康熙朝、復刻:台北　文海出版社、1992年
[清]允禄等監修　1732『大清会典』雍正朝、復刻:台北　文海出版社、1994年
[清]允禑等奉勅撰　1764『欽定大清會典』乾隆朝、武英殿聚珍板、江南省通行
[清]慶桂等奉勅撰　1811『欽定大清会典図』嘉慶朝、再版1818年、復刻:台北　文海出版社、1992年
[清]托津等奉敕纂　1818『欽定大清會典』嘉慶朝、1818年、復刻:台北　文海出版社、1991年

■正殿建築に関する近代以降の著作一覧

真境名安興　1925「首里城の沿革調査」『真境名安興全集』3、琉球新報社、1993年所収
真境名安興　1930「首里城百浦添建築の変遷」『備忘録』11、『真境名安興全集』3
伊東忠太　1925「琉球芸術の性質」『財団法人啓明会第15回講演集』財団法人啓明会事務局
伊東忠太　1928「琉球・建築」『世界美術全集』24、平凡社
真境名安興　1928「首里城の唐破風」『備忘録』8、『真境名安興全集』3
真境名安興　？(年代不詳)「沖縄の建築様式について　首里城と円覚寺」(未公表原稿)「歴史論考 II」、『真境名安興全集』3所収
伊東忠太　1936「琉球紀行」『伊東忠太建築文献』5、龍吟社
比嘉景常　1940「首里城正殿の龍柱に就いて」『琉球新報』1月1、5、6日掲載、沖縄県立図書館所蔵『天野鉄夫新聞切抜帳　琉球学集説』6・7所収
伊東忠太　1942『琉球-建築文化』東峰書房
[戦後]
沖縄県立図書館編　1985『首里城正殿図面集』[戦前昭和期修理國宝建造物沖縄神社拝殿図面]
高良倉吉　1988「首里城正殿に関する建築誌年譜」『沖縄県立博物館紀要』14
首里城研究グループ　1989『首里城入門』ひるぎ社
福島清　1993「唐破風」『琉球王府首里城』ぎょうせい所収
鈴木嘉吉　1993「正殿の概要」『琉球王府首里城』ぎょうせい所収
高良倉吉・福島清　1993「文献・資料解題」『琉球王府首里城』ぎょうせい、所収
高良倉吉　1994「首里城正殿の大龍柱の向きについての覚書」『首里城研究』1、1994.12.
福島　清　1996「首里城正殿重修史料にみる琉球建築の諸相」『首里城研究』2　1996.03.
高良倉吉　1996「首里城正殿の大庫理御差床高欄の復元をめぐる問題点」『琉球大学法文学部紀要』日本東洋文化論集2;再録『琉球王国史の探求』榕樹書林、2011
伊従　勉　1997「首里城正殿唐破風の起源とその改修について:王権儀礼の舞台装置の誕生」『首里城研究』3
高良倉吉　1998「首里城正殿の重修経過　道光26年(1846)重修を伝える尚家文書の要点」『首里城研究』4、1998.07.
安里進　1998「首里城正殿・基壇の変遷」「首里城正殿・基壇の編年と問題点」『グスク・共同体・村 』榕樹書林
伊従　勉　1998「琉球王権の場所:首里城正殿唐破風の誕生とその改修について」『建築史学』31;再録　伊従勉『琉球祭祀空間の研究』第11章、中央公論美術出版社、2005年
野々村孝男　1999『首里城を救った男:阪谷良之進・柳田菊造の軌跡』ニライ社
高良倉吉・福島清・平良啓・加藤真司　2003『首里城の復元:正殿復元の考え方・根拠を中心に』海洋博覧会記念公園管理財団発行
高良倉吉　2005「首里城正殿の重修にみる王府プロジェクト」『沖縄県史各論編4　近世』第五部第一章、沖縄県教育委員会
伊従　勉　2005「第11章　琉球王権の場所」(改稿)『琉球祭祀空間の研究』中央公論美術出版
上里隆史　2016『尚氏と首里城』吉川弘文館
下地昭栄　2020「察度王・首里城創建者と尚巴志・首里城正殿創建者」『首里城の創建者　初代「琉球国中山王察度』親星出版
高良倉吉　2020「首里城復元の経緯と意義に関する覚書」『沖縄文化』沖縄文化協会創設七〇周年記念誌
石井龍太　2020「首里城正殿の屋根変遷」『城西大学経営紀要』16
高良倉吉(監修)・島村幸一編　2021『首里城を解く』勉誠出版
伊従　勉　2021a「首里城正殿基壇遺構と正殿の柱列位置について」『首里城研究』23、首里城公園友の会発行
伊従　勉　2021b「中華礼制蕃国礼執行装置としての首里城」『首里城を解く』勉誠出版

□正殿基壇に関する論考

沖縄県教育庁文化課編　1986『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会
当真嗣一・上原静　1987「首里城正殿跡の発掘調査」『沖縄県教育庁文化課紀要』4
当真嗣一・上原静　1988「沖縄県首里城正殿跡」『日本考古学年報』39
宮本長二郎　1988「琉球文化の象徴　首里城の復元に向けて」七～九,『沖縄タイムス』2月4～6日朝刊
沖縄県教育庁文化課編　1992『首里城跡:首里城正殿跡の遺構調査』[遺構写真集] 沖縄県教育委員会
當眞嗣一　1993「遺構から見たその特徴」『甦る首里城　歴史と復元』首里城復元期成会
沖縄県教育庁文化課　1995『首里城跡　南殿・北殿跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会
安里　進　1996「首里城正殿基壇の変遷」『首里城研究』2　1996.03.
沖縄県教育庁文化課　1998b『首里城跡　御庭・奉神門跡の遺構調査報告書』沖縄県教育委員会
安里進　1998「首里城正殿・基壇の変遷」「首里城正殿・基壇の編年と問題点」『グスク・共同体・村 』榕樹書林
上原静　2004「第一部第4章　ぐすく時代」『沖縄県史　各論編2　考古』沖縄県教育委員会
安里進　2006『琉球の王権とグスク』山川出版社
伊従　勉　2010a「遺構からみる古琉球の首里城」『沖縄県史』各論編「古琉球」, 沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター編・発行　2016『首里城跡　－正殿地区発掘調査報告書－』
當眞嗣一　2020『琉球王国の象徴　首里城』新泉社
伊従　勉　2021a「首里城正殿基壇遺構と正殿の柱列位置について」『首里城研究』23、首里城公園友の会発行
山本正昭　2021「首里城の原点についての一考察」『首里城を解く』勉誠出版

□龍柱・匾額・御書に関する論考

比嘉朝健　1926「琉球の石彫刻龍柱」『アトリエ』掲載記事
真境名安興　1928「首里城の龍柱」『備忘録』8、『真境名安興全集』3
真境名安興　1931「製図と彫刻に貢献した蘇姓儀保為宜の事」『備忘録』11、『真境名安興全集』3
真境名安興　1931「御後絵について」『笑古漫筆』86、『真境名安興全集』3
比嘉景常　1940「首里城正殿の龍柱に就いて」『琉球新報』0101-05-06連載記事
島袋源一郎　1940「琉球と龍物語」『琉球新報』1月1日掲載記事
作者不明　1953「龍柱をめぐるナゾ」沖縄タイムス1月12日、天野鉄夫新聞切抜帳8
比嘉春潮　1972「首里城正殿の竜柱」沖縄タイムス1月6日、天野鉄夫新聞切抜帳35
石川和男　1984「正殿龍柱の謎」沖縄タイムス8月27日、天野鉄夫新聞切抜帳166
西村貞雄　1987「龍柱について」『新生美術』6
西村貞雄　1988「龍柱について」『琉球大学教育学部紀要』33
日本公園緑地協会編1988 「龍柱の事例」「中国での龍の形態の変遷」「龍・古建築の油漆について」『首里城正殿実施設計委員会資料 第2回 資料編』
西村貞雄　1988「首里城正殿大龍柱(縮尺1/5)復元経過について」『首里城正殿予備設計報告書』沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編
高良倉吉(監修)　1992「第一部　大龍柱」『甦る首里城』沖縄銀行
西村貞雄　1993「首里城正殿大棟龍頭棟飾りについての考察 」『琉球大学教育学部紀要』42
西村貞雄　1993「首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察」『琉球大学教育学部紀要』42
西村貞雄　1994「首里城正殿の彫刻(龍柱等)の意味するもの」『博友』8、沖縄県立博物館友の会
高良倉吉　1994「首里城正殿の大龍柱の向きについての覚書」 第1号、1994.12.;再録:同著『琉球王国史の探求』榕樹書林、2011年
池宮正治　1996「中国皇帝の御筆扁額と首里城」『首里城研究』2, 首里城研究会
西村貞雄　1996「首里城正殿の龍の配置と様式についての考察」『琉球大学教育学部紀要』48
西村貞雄　1998『首里城正殿の建築に付随する彫刻の意匠としての解明』科学研究費補助金研究研究成果
安里進　2000「首里城木挽門裏採集の大龍柱残欠」『首里城研究』5、 2000.03.
首里城公園友の会編　2003「第三章正殿の復元　2基壇　(5)龍柱」『首里城の復元:正殿復元の考え方・根拠を中心に』(財)海洋博記念公園管理財団発行
西村貞雄　2008「首里城周辺の建造物と彫刻に関する意匠の共通性と独自性について」『琉球大学教育学部紀要』72
海洋博覧会記念公園管理財団［編］ 2010『首里城正殿扁額等基本及び実施設計業務報告書』
宇佐美賢ほか　2018「首里城の大龍柱と伝えられる残欠の石質について」『博物館紀要』11、沖縄県立博物館・美術館
宮里朝光　2018「第二章第二部　首里城案内・首里城の大龍柱・御行幸」『知られざる琉球の歴史文化』上巻、御茶屋御殿復元期成会
宮里朝光　2019「首里城の大龍柱」『博友』31、沖縄県立博物館友の会
西村貞雄　2020「首里城正殿の遺物分析」『文化財発掘出土情報』474
高里盛国　2020「中国清皇帝より琉球国中山王への欽賜扁額(資料紹介)」首里城研究　第22号　2020.03.
ジャパン通信情報センター　2021「京の内に大龍柱片」『文化財発掘出土情報』478
沖縄県立埋蔵文化財センター編・発行　2021「コラム　京の内出土の大龍柱の破片」『発掘された倉庫跡』
平田由美　2021「大龍柱」『博友』33、沖縄県立博物館友の会

□首里城正殿を描いた絵図に関する論考

真境名安興・東恩納寛惇　(1917)「首里古地図」論争『沖縄朝日新聞』『真境名安興全集』三、琉球新報社、1993年

嘉手納宗徳　1983「王都首里の町並み分布」宮城・高宮編『沖縄歴史次図』柏書房
富島壮英　1987「描かれた首里城と首里」首里城復元期成会編『首里城』那覇出版社
伊従　勉　1998「琉球王権の場所：首里城正殿唐破風の誕生とその改修について」『建築史学』31
伊従　勉　2000「「首里古地図」の製作精度について：琉球における測量術の発達と首里絵図」足利健亮先生追悼論文集編纂委員会（編）『地図と歴史空間』大明堂
伊従　勉　2004a「首里古地図　上」『沖縄タイムス』六月七日朝刊
伊従　勉　2004b「首里古地図　下」『沖縄タイムス』六月一四日朝刊
伊従　勉　2004c「発見された首里城古絵図」『沖縄タイムス』六月二八日朝刊
上里隆史・深瀬公一郎・渡辺美季　2005「沖縄県立博物館所蔵『琉球國図』」『古文書研究』60
伊従　勉　2007「新発見の「首里城古絵図」の測量法について」『民族芸術』23
伊従　勉　2008「元文（乾隆）検地以前の測量法と絵図」『しまたてぃ』47、沖縄建設弘済会
安里　進　2013「首里王府の重要施設絵図調整事業」『首里城研究』15、 2013.03.
安里　進　2019「描かれた首里城正殿の虚実」『沖縄県史 図説編　前近代』2019年、沖縄県教育委員会
琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編　2019『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版
麻生伸一・茂木仁史編　2020『冊封琉球全図』雄山閣［1719年「冊封中山王図」「仲秋宴図」原図］
黒嶋　敏　「「首里城並諸方絵図間付差図帳」について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』90、2020.10.
渡辺美季　2020「「琉球首里の図」・「琉球那覇図　古河歴史博物館蔵「鷹見泉石関係資料」より」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』90、2020.10.
渡辺美季　2020「『琉球沖縄本島取調書』所収「首里城ノ図」について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』90、2020.10.

□首里城古写真について

Revertégat, Jules. 1877. ″Chateau royal à Shuri″［正殿写真］、所蔵者Hervé Bernard, France.
阪谷良之進　1931～33『首里城正殿(沖縄神社拝殿)特別保護建造物修理工事関係資料』沖縄県立図書館所蔵「阪谷良之進文書」
田辺泰・巌谷不二雄、1937『琉球建築』座右宝刊行会
坂本万七, 1982『沖縄・昭和10年代 』新星図書出版
鎌倉芳太郎、1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店
野々村孝雄　1999『首里城を救った男　阪谷良之進・柳田菊造の軌跡』ニライ社
野々村孝雄編　2000『懐かしき沖縄　山崎正董らが歩いた昭和初期の原風景』琉球新報社

□正殿の儀礼に関する論考

上原ゆかり　1994「首里城正月儀式「朝拝御規式」調査概要」『首里城研究』1、1994.12.
真栄平房昭　(1988)2020「琉球国王の冊封儀礼」、窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集刊行委員会編『沖縄の宗教と民俗』 第一書房；再録『琉球海域史論』上巻
真栄平房敬　1988「首里城内の生活と儀礼」『沖縄の宗教と民俗』第一書房
真栄平房敬　1989『首里城物語』ひるぎ社
豊見山和行　1989「冊封の様相」『新琉球史近世編』 上巻、琉球新報社
豊見山和行　1990a「琉球国王家年中行事正月式之内」（翻刻）『浦添市立図書館紀要』2
豊見山和行　1990b「琉球王権への一視点　近世における儀礼の転回」『文芸　特集アジア王権論』河出書房新社
林慶元　1996「明清冊封琉球儀注考述」『中琉歴史関係論文集』第5届中琉歴史関係学術会議論文集
伊従　勉　1998「琉球王権の場所：首里城正殿唐破風の誕生とその改修について」『建築史学』31
福島　清　1998「冊封儀式にみる建築像(上)」『首里城研究』4、 1998.07.
福島　清　2000「冊封儀式にみる建築像(下)」『首里城研究』5、2000.03.
伊従　勉　2003「聞得大君の御新下り儀礼は御初地入りか?」『首里城研究』7、2003.03.
真喜志瑶子　2003「『おもろさうし』のキミカナシと<ヒキ>の官員：首里城正殿下庫理の稲二祭のオモロにうたわれる者」『沖縄文化研究』29, 法政大学沖縄文化研究所
上江洲安亨　2005「王権・外交儀礼の拠点としての首里城」『沖縄県史　各論編4　近世』沖縄県教育委員会
伊従　勉　2005「第11章　琉球王権の場所」（改稿）『琉球祭祀空間の研究』中央公論美術出版
真喜志瑶子　2007「王城祭祀における禁中女官・君々ほかの職事に関する基礎的考察：首里城正殿大庫理と大美御殿を中心に」『沖縄文化研究』33、法政大学沖縄文化研究所
伊従　勉　2010b「琉球祭祀にみる虚構と現実」『国際沖縄研究』創刊号、琉球大学
池宮正治　2010「王府の祭祀と信仰」『沖縄県史各論編3　古琉球』沖縄県教育委員会
伊従　勉　2010a「遺構からみる古琉球の首里城」『沖縄県史　各論編3　古琉球』, 沖縄県教育委員会
麻生伸一・上江洲安亨　2019「琉球王権と儀礼」『沖縄県史 図説編　前近代』沖縄県教育委員会
麻生伸一　2021「近世琉球期の首里城：儀礼空間としての首里城」『首里城を解く』勉誠出版
伊従　勉　2021a「首里城正殿基壇遺構と正殿の柱列位置について」『首里城研究』23、首里城公園友の会発行
伊従　勉　2021b「中華礼制蕃国礼執行装置としての首里城」『首里城を解く』勉誠出版

□中山王皮弁冠服に関する論考

啓明会（財団法人）事務所編　1928『創立十年記念展覧会図録』
真境名安興　「御後絵について」『笑古漫筆』、『真境名安興全集』3、琉球新報社、1993年所収
豊見山和行　1988「琉球国王位と冊封関係について」『第一届中琉歴史関係国際学術会議論文集』
上江洲 敏夫 1994「御後絵(国王肖像画)について」『首里城研究』1、1994.12.

首里城研究会編　2010、『首里城研究』12、「御後絵特集」
雁野 佳世子　2013「尚育王御後絵の復元模写製作を終えて」『首里城研究』15、2013.03.
吉田直人　2013「尚育王御後絵復元のためのモノクロ撮影実験について」『首里城研究』15
平川信幸　2018「御後絵の図様的特徴について（論文）」『首里城研究』20、2018.03
平川信幸　2019「御後絵の歴史と戦前の保管をめぐる経緯について（論文）」『首里城研究』23、2021.03.
平川信幸　2021「御後絵の衣裳からみる国王イメージについて（論文）」『首里城研究』23、2021.03.
久貝典子　2021「首里グスクを中心とした衣文化」『首里城を解く』勉誠出版

■平成復元事業以前の正殿に関する歴代報告書ほか［*：沖縄県立図書館所蔵］

*国宝建造物沖縄神社拝殿修理事務所　1928-33『国宝建造物沖縄神社拝殿図』文化庁所蔵、『首里城関係資料集』1987年所収
*国宝建造物沖縄神社拝殿修理事務所　1928-33『国宝建造物沖縄神社拝殿修理工事新設計内訳書』文化庁所蔵、『首里城関係資料集』1987年所収
*沖縄総合事務局開発建設部編　1987『首里城関係資料集』
*沖縄総合事務局開発建設部編　1987.03『首里城正殿基本設計報告書』
*日本公園緑地協会編　1987.10『首里城正殿予備設計委員会　第1回　資料編』
*沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　1988a『首里城正殿予備設計報告書』
沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　1988b『首里城正殿・御庭ゾーン建築物基本計画報告書』
*日本公園緑地協会編　1988.08『首里城正殿実施設計委員会資料　第1回　資料編』
*日本公園緑地協会編　1988.10『首里城正殿実施設計委員会資料　第2回　資料編』
*沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　1989『首里城正殿実施設計報告書』
*沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　1991『国営沖縄記念公園』
*海洋博覧会記念公園管理財団（総監修）　1993『琉球王府首里城』ぎょうせい
*沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　1994『国営沖縄記念公園首里城地区建設の記録』
*沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　1995『国営沖縄記念公園首里城地区計画・設計の記録』沖縄開発庁沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所発行
*海洋博覧会記念公園管理財団（編・発行）　1995『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』
海洋博覧会記念公園管理財団（編）　1996『平成七年度下之御庭周辺調査設計業務報告書』
*沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所編　2002『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』
*国営沖縄記念公園事務所（企画・編集）　2002『首里城物語』海洋博覧会記念公園管理財団首里管理センター
*首里城公園友の会編　2003『首里城の復元：正殿復元の考え方・根拠を中心に』(財)海洋博記念公園管理財団発行
*沖縄美ら島財団首里城公園管理部編・発行　2018『首里城物語』

□図法理論の歴史的発展（軸測投象・透視図法・正投象）に関する参考文献抄録

Alberti, Leon Batista. 1435. ***Della Pittura***, Reproduction: 1950, Luigi Mallé (ed.), Sansoni, Firenze. 邦訳：三輪福松訳『絵画論』中央公論美術出版、1992年
Dürer, Albrecht 1525, ***Unterweisung der Messung***, Reproduction: 1972, Verlag Walter Uhl. Unterschneidheim［透視図法理論］
Dürer, Albrecht 1969, ***Schriftlicher Nachlass***. Hans Rupplich (ed), Deutchere Verlag für Kunstwissenschaft. 邦訳：『「絵画論」注解』下村耕史訳編、中央公論美術出版、2001年
Gaspard Monge, 1799, ***Géometrie Descriptive***. reprod.: Éditions J. Gabay, 1989［画法幾何学：正投象理論の発明］; 邦訳：山内一次訳『画法幾何学』山内一次遺稿刊行会、1990年
Booker, Peter-Jeffrey, 1963, ***A History of Engineering Drawing***, 邦訳：原正敏訳『製図の歴史』みすず書房、1967年
Aubert, Jean, 1982. ***Cours de dessin d'architecture à partir de la géométrie descriptive***, édition de la Villette.
小山清男・面出和子　1982『造形の図学』日本出版サービス
小山清男　1996『幻影としての空間』東信堂［透視図法の文化史］
玉腰芳夫・伊従勉　(1984)2000改訂　『図学』上下巻、ナカニシヤ出版
その他、図学の教科書は無数に存在する。図学講義を行っている大学の図書館を乞参照。